

エンディミオンの遍歴

三 浦 勲 夫

1

キーツは弟ジョージの妻、ジョージアナへの手紙で、自分の名であるJohnはどうも気に入らないから子供の名として選ばないように、ということを書いたことがある。Edmundという名前だったら自分ももっと幸せだったろうというのである。¹⁾ 彼の連想が、幸福な名前としてEdmundを選んだのはなぜだったのだろうか。キーツがほれこんだ、時の名優Keanの名前であったからだろうか。*Endymion*, Book I の34行以下を読むと、それはどうやら音の柔らかいひびきであつたらしいことが判る。何よりもEndymionという、このとろけるような音の流れの中に、キーツは幸福——「本質との合一」²⁾——を想像したのである。キーツは、このPoetic Romanceにおいて想像力を駆使して幸福——愛の夢——を追った。それは愛と死についてのロマンスというよりも、愛と不死の新らしい神話の試みであつた。同時に、孤独を見つめる彼の目も、友のない「寂しさ」から、人間の根本的な「存在」その物に向けられて行つたようである。

キーツは「エンディミオン」執筆のため、友人ヘイドンにすすめられて長くロンドンを離れた。³⁾ ワイト島、キャリスブルク、マーゲート、オクスフォードと、主人公エンディミオンのように遊びながら1817年4月から11月迄、規則的なペースで書き続けた。しかしその間、友人に宛てた書簡には強烈的な孤独感を表わして、ワイト島にくらべて友人のいる本島を「大陸」⁴⁾と呼ぶ程でもあつた。また、「エンディミオン」に先立つ1817年詩集には、かけがえのない兄弟愛と友情をうたつた作品もあつて、そこではsocialという語が、親密な心の慰めを意味しているのである。

But what, without the social thought of thee,
Would be the wonders of the sky and sea?

1) L.172 (Jan.13~28, 1820) If my name had been Edmund I should have been more fortunate.

2) Fellowship with essence. Book I, l. 779

3) L.9 (Mar.17, 1817) レノルズ宛

4) L.13 (Apr.17~18, 1817) レノルズ宛
from here I can see your continent...

—To my brother George.

でも仲良しのお前を思い出さなくては
空や海の驚きも何になろうか。

Great spirits now on earth are sojourning ;

...

He of the rose, the violet, the spring,

The social smile, the chain for freedom's sake :

偉大な魂が今地上に住んでいる。

...

バラとスマイレと泉,

あたたかい微笑と自由を守る鎖の魂が。

その孤独感が「エンディミオン」にも大きな影を落とし、作品全体のカナメともいえる「幸福の段階」論にも感じられるのである。自然、古代（神話）との合一、そして友情と愛の中に幸福がある、という考え方には、対象に没入して慰めを求める、孤独な詩人の姿をかい間見る思いがする。それは、実人生において失なうことの連続であったキーツが、当然辿りつく幸福論であったかも知れない。没入を意味する fellowship には、感情移入とは異なる魂の連絡、慰めの意味がここではこめられている。

ただ、孤独の慰めである三種の物がすべて作者の合一の対象である、ということになれば、作者は identity を欠くことにもなるし、又、木、風、曲などの中にもエンディミオン（キーツ）の心が宿り、更には、グローカス、インド娘、月の女神に迄、作者の分身が乗り移ることになる。そして、作品の完成後一年を経て、「詩的性格」として説明される identity の抹消⁵⁾の不安が新たに立ち向うべき問題として残されていく。キーツは Book IV において、月の女神のほかにインド娘をも愛し始めたエンディミオンに、identity を欠いた恐れを語らせるが、問題は両者の忽然たる同一化——Bate のいう deus ex machina⁶⁾—によって処理されるに過ぎない。

ただ、インド娘がシンシアとなることにより、結果的には、月・女神・娘はエンディミ

5) L.93 (Oct. 27, 1818) ウッドハウス宛

As to the poetical Character itself... it is not itself—it is everything and nothing
—It has no character.

6) Bate, Walter Jackson: John Keats p.183, Oxford. 1967

オンの寂しさを満たし幸福を分かち物として、はじめから一つの物であり、幸福の各段階における別々の姿であったことが示されることになる。一つの物足りなさは残るが、「エンディミオン」はキーツ詩への鍵を与えてくれる。「消極能力」⁷⁾と「詩的性格」の原形、ロマン派のオブティミズムとキーツの物であるペンミズム（内至ニヒリズム）の混合、夢と現実のおりなす一条の軌跡、こうした物をこの作品が豊富に見せてくれる。キーツは、詩の課題と方向を設定して出発した。それは自然界における蝶の変態とは逆に、蝶からサナギへのコースといていい。⁸⁾ 蜜と光を求めて空に舞う時期を経て、地上で魂をきたえるコースを迎える。最初に出版された2冊（1817年詩集と「エンディミオン」）は、基本的には蝶が綴った詩ともいえる。が、「エンディミオン」にはその羽をたたもうとする兆しが見える。「創造の試練」⁹⁾の果てに、浮遊によってはあざむくことのできない重しが、羽にのしかかるのである。

後の作品で、アポロがニーモジニーの智慧を享けて、輝く神へと生まれ変わる部分で作品が中断された。キーツは人間の生き方の理想を「神化」の中に求めはしたが、それは秘蹟ではなくて、人の生に課される重みが与える一つの真理の体得であることを意味している。キーツは詩人であった。生活をする人というよりは、生活を考える人であった。生活の核へひきつける求心力と、想像力から受ける遠心力との間で、一条の軌跡を残した一人の芸術家であった。「エンディミオン」は夢と現実、想像と孤独についてキーツ像に一つの足掛かりを与えてくれるようだ。そしてこの作品は、放浪と幸福の段階が、章を追って展開されるので、月への恋に始まり死（による愛の完成）に至る経過を追いながら、一つの考察を試みたいと思う。

2

Book I 冒頭の5行は、美へのつきない信頼を宣言している。エンディミオンの終局的幸福を予言するのに充分である。

A thing of beauty is a joy for ever :

Its loveliness increases ; it will never

7) L.32 (Dec.21, 1817) 二人の弟宛

I mean Negative Capability, that is, when a man is capable of being in uncertainties, mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact and reason....

8) L.137 (Jul.11, 1819) レノルズ宛

I have of late been moulting: not for fresh feathers and wings: they are gone, and in their stead I hope to have a pair of patient sublunary legs. I have altered, not from Chrysalis into a butterfly, but the Contrary, having two little loopholes, whence I may look out into the stage of the world.

9) L.26 (Oct.8, 1817) ベーリー宛

pass into nothingness ; but still will keep
 A bower quiet for us, and a sleep
 Full of sweet dreams, and health, and quiet breathing.

美しい物は永遠のよろこび、
 愛らしさはつとり
 つきることはない。いつも
 静かな庵をひろげ、眠りには
 甘い夢と健康とひそかな息を満たす。

ふくらみ続ける美の「愛らしさ」は静かな庵の眠り——即ち想像¹⁰⁾——を結ぶ。それは結局、幸福の夢である。夢は孤独の上に築かれる楽園であって、外界の挑戦を受けなければならない。それは「失望、崇高な人格の欠除、暗うつな日々、不健康で暗い行路」即ち unfair で pessimistic な物を以て人間を見舞う。しかし美、想像がそれらの重い「棺衣」を取り去って心を晴らしてくれる、ということが作者の若々しい信頼である。医学にも接したキーツには、詩（想像・美）は心の苦痛を鎮める薬剤であった。不可欠の抗絶望剤、それが希望の正体でもある。想像力の勝利、肉体を超える精神への信頼（という楽観）に支えられて、羊飼いの若者は超自然の放浪を終えて、永遠の幸福を手にする。キーツにとって勘らない魅力を遂に失なうことがなかった¹¹⁾精神的錬金術のテーマである。

深い森に囲まれてパンの羊が遊ぶ草原は、想像力を秘めた心の風景でもある。象徴的に見れば、草原をつつむ森の木、差しかわす枝は肉体であり、魂は大空へ鳩になり、雲となって飛び立ち、「憂うつな魂は忘却を得て、風の中にその純粋な本質を溶かしこむ」のである。spirit, ether, sublime などの持つ、夾雑物の溶解、昇華作用の連想¹²⁾もさりながら、空気、風がこの作品でになう役割は、魂の没入としての fellowship なしには考えられないのであって、まさにそれは声なき言葉、言葉なき意味に満たされている。こうして想像力の遊ぶ神話的風景と放心の世界が、あらかじめ語られる。

物語りはテッサリーの守護神、パンを讃える祭に始まる。「宇宙の知識にいたる神秘の扉を開く畏き者」、想像力を絶する全智の所有者 Pan (=all) に捧げる讃歌が歌われる。それは美の「愛らしさ」、愛を求めて、これからさすらうエンディミオンの行方を示す歌でもあると考えたいのだが、しかし、これは月の世界である「エンディミオン」の主題で

10) *Sleep and Poetry*

11) L.238 (Sep.30, 1820) ブラウン宛

Is there another Life? Shall I awake and find all this a dream? There must be we cannot be created for all this sort of suffering.

12) 小川和夫: *Wherein lies happiness* 「英語青年」 第121巻 第7号

はなく、太陽の世界、後の「ハイペリオン」のテーマとなる。祭の日、エンディミオンの青ざめた様子を見た妹ピオナは、原因をたずね、憂いを晴らそうとする。兄はその思いやりに応えて、一旦は気を晴らして見せる。

お前のこのやさしい愛を
私は胸一杯に感じる・・・
その涙よりも天に近いものを
望むことができるだろうか。

先にあげたソネットや数々の手紙¹³⁾からも判るように、兄弟(妹)愛は夢の中にも、現実の中にも、永くはとどまることのなかったキーツの貴重な安息所、中継地であったと考えられる。今、ピオナが失神する程の恋に悩む兄を、現実へと呼び戻す、現実的判断を代表する身近な力となるが、しかし、それは結局は受容する「愛」でもある。兄は夢で見た乙女(月)の話をする。川が森のふちを洗い、ケンのゆれる草原で、ある黄昏に眠りにおちると、彼は一人星空を飛遊しているが、その時、雲間から、忽然と現れた乙女(の姿をした月)があった。美しい娘は近寄り彼の手をとる。茫然自失を辛うじてこらえる彼の意識は、抱擁の瞬間も奇妙にさめている。

madly did I kiss

The wooing arms which held me, and did give
My eyes at once to death: but 'twas to live,
To take in draughts of life from the gold fount
Of kind and passionate looks; to count and count
The moments, by some greedy help that seem'd
A second self, that each might be redeem'd
And plunder'd of its load of blessedness.

第二の自分とも見える貪欲な手で
瞬間の一つ一つを取りもどし
その至福を奪うために
一刻一刻を数えた。(一部訳)

火花がダイヤモンドに映って消えるような夢であった。ケンが頭をたれ、ツグミの歌も

13) L.127 (May 31, 1819)

My brother George always stood between me and any dealings with the world.

重い、鉛色の朝を迎える。先に述べたように、風がエンディミオンの心その物として随所に配置されているのだが、今は、わびしい(solitary)朝風が吹き寄せる。ギリシャの人々が、「翼ある」物として霊を伝える言葉を神聖視したように、キーツは、霊を伝える物として風をとっているのである。

Solitude が夢のあとに一つの滓となって残される。それは、夢にとけて束の間の喜びを作るだけだ。慰めのことばが無駄なことを知ったピオナは兄の夢を責める。

how light

Must dreams themselves be ; seeing they're more slight
Than the mere nothing that engenders them !

夢なんてきつとどんなに軽いことか、
それを生む無よりもつまらないのだから。

エンディミオンは、妹の反論に対してはじめて頬に生気を戻して、夢の喜びを語る。それは、「創意の試練は長い詩である」¹⁴⁾と語る時と同じ帆船の比喻である。

ピオナよ、これまで私は世の賞讃を
かつえ求めてきた。卑しいもの、
眠りの妄想などは、わが舟路の
不屈の帆をゆるめなどしなかった。
それが今はちぎれ、船は裸になり
ふさぎこんで漂よってはいるが、
高い希望は、虹さながらに広く大きく
幾万の地上の難破にも焦だちはしない。

当時の手紙を援用すると、彼の語る夢は気紛れの夢ではなく、真理の先駆として現れる shadow of reality¹⁵⁾, half-knowledge¹⁶⁾である。エンディミオンは、不退転の帆を広げ

14) L.26 (Oct.8, 1817) ベーリー宛
a long poem is a test of Invention which I take to be the Polar Star of Poetry, as
Fancy is the sails, and Imagination the Rudder.

15) L.31 (Nov.22, 1817) ベーリー宛
It is 'a vision in the form of youth' a shadow of reality to come.

16) L.32 (Dec.21, 1817) 二人の弟宛
Coleridge, for instance, would let go by a fine isolated verisimilitude caught from
the Penetrarium of mystery, from being incapable of remaining content with half-know-
ledge.

てそれを求めていくのだ、と宣言しているのである。このあとに、幸福論が展開される。

Wherein lies happiness? In that which beckons
Our ready minds to fellowship divine,
A fellowship with essence ; till we shine,
Full alchemiz'd, and free of space.

幸福はどこにあるのか。待ちうける心を
崇高なる合一へ
本質との合一へと誘い
この身を金の光と化し、空に馳せる物に。

幸福は、待ち受ける心を純精な合一へと誘い出す物の中にある。それはエッセンス（本質）との合一である。その時、我々は錬金術的变化を遂げて、空に羽ばたき、輝くに至る。

見よ清らなる天の森厳を。バラの花卉を
細い指先にまき唇をそっとしずめよ。

視覚、触覚を通して魂を誘い出す自然美。その中に溶けこむことが第一の幸福である。幸福は、テラー宛書簡¹⁷⁾によると段階的に強度を増し、自然美はその最初の物で、その上にある物が回想の幸福である。それは魂に呼びかける旋律によって、聴覚を通して思い浮べられる。神話、ロマンスの神や人が立ち現われ、彼らとの交わりが喜びを与えるのである。

黙せよ、
楽の音が空気にくちづけ、風を孕ませ、
共鳴する指でその透んだはらから
イオリアの魔法を解き放つとき。
その時、古えの歌はけむる墓からめざめ
古謡はその父の墓の上に低く歌う。
妙なる予言の幻はアポロの歩みのあとを
くまなくさまよい、

17) L.42 (Jan.30, 1818)

a regular stepping of the Imagination towards a Truth...gradations of Happiness...
Pleasure Thermometre.

まばやくラッパはめざめ遠くなり渡る、
 その昔、巨人の斗いの地に。
 みどり子オルフェウスのねむった
 芝土の下からは子守唄が流れる。
 君はこれらの物を感じるか、——そのとき
 我等はただ一つとなり、
 漂よう精神の状態となる。

そして、幸福の第三段階は友情と愛である。心を固くつなぎ、結ぶ物である。その説明は、ファニーへの最初の手紙¹⁸⁾を思い起こさせる。

しかし更に豊かな拘束、人を無に帰し
 虜となす物があり、それはやがて
 強烈な核へと導かれる。その冠は
 愛と友情からなり
 人類の額に高くかけられる。

エンディミオンの恋する対象も、月、女神、娘というふうに幸福の段階に対応して移っていく。月を失なった寂しさは、物語りと共に内面化され、愛は、インド娘との出会いと共に、死の思いに迄深まる。さて、豊かな拘束、人を無に帰し虜となす物は、遂に強烈な友情と愛になる。これはキーツ個人ではなく、人類の額に戴く冠である、という。ここに詩人の人道主義を見てもさしつかえはないだろう。

ただ、パンの全智と共にこれも物語の主調ではない。友情は、第二の幸福とは異なり、一瞬の慰めではなく消えることのない光輝 (steady splendour) を放ち続ける。そしてその冠の頂きに見えざる糸によってつるされた丸い光の玉 (orbed drop of light) が愛である。愛の力は、一度人の目に注がれる時、全く新らしい感覚をよび起こし、驚愕と焦悴を与え、やがて、人はその光にとけこみ、その一部と化す。愛はこれ程速やかな翼を以て (so wingedly) 人間の魂をとらえ、驚くべき魔力を以て、それを取りこにし、無にする。稀薄な光の雫が生を育む力を与える —— Life's self is nourish'd by its proper pith —— その故に愛は最大の価値を与えられる。

(1) ナイチンゲールの歌声は愛の呼び声であるが、「夜」も夜明けを惜しんでその声

18) L.134 (Jul.1, 1819)

Ask yourself my love whether you are not very cruel to have so entrammelled me,
 so destroyed my freedom.

に聞き入っている、そのように愛は他の者にも喜びを与え、

(2) 又、人間に愛の喜びがあるから、自然の回帰、或いは魂をゆさぶる旋律の力がわかる、というように、空間にも、時間にも、普ねく及ぶ愛の力を説明する。かくして現在のエンディミオンは、そのゆるぎない目的 (stedfast aim) の中に不滅の愛 (love immortal) を抱いているのであるから、牧人の王として名声を得ようなどという努力は、全くの気紛れに思われてしまうのも当然である、とピオナに説く。それでも合点がいけないピオナに、兄は次のように語り続ける。

My restless spirit never could endure
To brood so long upon one luxury,
Unless it did, though fearfully, espy
A hope beyond the shadow of a dream.
My sayings will the less obscured seem,
When I have told thee how my waking sight
Has made me scruple whether that same night
Was pass'd in dreaming.

休むことを知らぬこの心は
長く空想の蜜をむさぼることはない、
もし、恐ろしくとも、夢の影の背後に
希望の姿をみとめなければ。
こういえば分り易いかも知れない、
めざめても、あの夜のことが
果して夢にすぎなかったのか
未だに信じかねる、と。

おおむね同じことを、夢と真実について語っている手紙がある。「失樂園」に言及するアダムの夢のたとえである。¹⁹⁾ キーツが真理を把握する方法は決して consecutive な物とはいえない²⁰⁾。科学的な観察とは似て非なる観察、そこからの直観的な突進によって、verisimilitudeを得ることが目的とされている。それが、没我没入、夢の道をたどり精神は一

19) L.31 (Nov.22, 1817) ベーリー宛

The Imagination may be compared to Adam's dream—he awoke and found it truth.
cf. *Paradise Lost* viii 460~490

20) L.31

I have never yet been able to perceive how anything can be known for truth by consecutive reasoning—and yet it must be.

且は解放されて、肉体の外にさまよい出るのである。しかし、いつも覚醒が待ち構えているのであり、孤独の我に突き返される。アダムの子のたとえにしても、それが作り上げたイヴは、彼の体の一部である。ego と alter ego と見ても良いであろう。敢えて生物学の領域の言葉を借りれば、無性の増殖によって複製の子のみがもたらされる夢なのであって、キーツの孤独は、この大事な比喻に於いて図らずも浮び出るのである。このペーリー宛の手紙の中では、真理の影が夢の形となって、何度も我々を訪れることを語るのだが、月とのめぐりあいも三度あった。

二度目は、深い峡谷にかくれた泉で、水面に映っては消えて行く雲を眺めている時、そこに夢で見た輝く顔がうつり、微笑む。立ち上ると、その顔は消え、空にはすがすがしい露にぬれた花や葉が飛来して、周囲をおおう。空に飛び交うバラは、ボッチェリの「ヴィナス誕生」の構図でもあるが、これがエンディミオンに与える新らしい喜びは幸福の第一段階に対応する、ともいえる。

バラの花卉を細い指先にまき

唇をそっとしずめよ。

素晴らしい幸福感——such a breathless honey-feel of bliss——が、かげの消滅したあとの落胆——drear abyss of death——にあって彼を支えるが、喜びは束の間で、苦しみは永い。その交替が、sickness と health の相剋である。全体を通じて、これらのメタファが多いのであるが、これも勿論、孤独感に注がれる光と影と切り離すことが出来ないように思われる。

How sickening, how dark is the dreadful leisure

Of weary days, made deeper exquisite,

By a fore-knowledge of unslumbrous night :

わびしい日のおぞましい時は

何と暗く心病ませるものが、

眠れぬ夜の子感が更に胸を痛ます。

そして後続の行では、比較級によって更に大きな苦痛と喜びが叙述される。

Like sorrow came upon me, heavier still,

Than when I wander'd from the poppy hill !

And a whole age of lingering moments crept

Sluggishly by, ere more contentment swept

Away at once the deadly yellow spleen.
 Yes, thrice have I this fair enchantment seen ;
 Once more been tortured with renewed life.

あの同じ悲しみが来た、けしの丘を
 さまよい去った時より更に重たく。
 おそい時の歩みは、なかなか
 去らなかったが、更に大きな満足が
 死の黄色い憂うつを払いのけた。
 そうだ、三たび私は美しい魅惑を得、
 またしても、新しい命に苦しんだ。

徐々に喜びと落胆が、その度合いを強めて行く。翌春の狩の道すがら、彼は溪流の源にある洞穴に達する。この洞穴は、たれこめた草にかくされて、妖精の住処を思わせる場所である。エコーの洞穴に違いない、と想像して乙女への誓いを託す。

send honey-whispers

Round every leaf, that all those gentle lispers
 May sigh my love unto her pitying !

蜜のささやきを

木の葉に送り給え。やさしい片言で
 私の愛を彼女のなさけに囁くように。

注意したいのは、このような擬人化である。lispers ——片言をいう人—— とは、ここでは数の一致は無視されてはいるが、木の葉のことである。ことばをはらんだ風、語りかける木の葉、反射する泉、そうした自然界の連絡が人間の営為とも交流している。poetical character とか negative capability として、後にまとめられていく審美的没入の方法として、擬人化は素朴で神話的な一つの方法である。

その時、月のことばが聞えてくる。intensity が高まっていく過程は視覚（顔）から聴覚（声）への移行、つまり第一の幸福から第二の段階へ、という手段でも表わされているのである。今やエンディミオンの夢は実現の確信を固められ、「無よりも軽い」物ではない。兄は妹に、愛について、夢について、自分の決意について説明してから、理想追求に旅立つ段取りをむかえる。

3

Book II のプレリュードとして愛の至高が讃えられる。古えの記録は、冷やかにかすんではいるが、愛の伝承のみはその活力を失なわない。トロイの血の記憶も時と共にうすらぐが、トロイラスとクレンダの物語りは、いつまでも心にとどめられるのである、と。ところで、作者が一人称でこれを語る時、それはエンディミオンがピオナに与えた説明と同じことであって、作品全体は作者の主観が色濃く投影された、叙事的叙情詩であるといえる。森、風、泉²¹⁾、再には千年の老いを負わされたグローカスもが、作者を投影しているのである。

ここで、トロイラスとクレンダの例が登場するのは、トロイのたたかひの記憶との関係以上に、2章、3章の内容に関係しているようだ。エンディミオンは喜びと悲しみの交替の果てに、愛の分裂へと導かれていくからである。それは精神の主体性——identity——とは別物である官能の入口からしのび込む。

ギリシャ人が古くから人間の魂 (psyche) を蝶の中に象徴してきたのは、カラを抜け出て宙に舞い上る姿が、肉体をのがれる精神として想像されたからである。エンディミオンを地底に通じる洞穴に導くのも、幻の蝶である。

その蝶は川辺のバラが化身した蝶であり、それを追う彼は「漂よう精神の状態」²²⁾へと魂入られていく。

彼は飛んでいるよう、足はそれ程かるく、

うまれたばかりの心のように進んだ。

蝶は洞穴まで来て水にふれて消えて行く。すると、水の精が現われて、彼をここまで導いて来たのは自分であったこと、人間の境界を脱する戸口——mortal steps——に至る狭い関門を越えて、未知の地を歩いて行けば、あこがれの人に達することを告げる。孤独ではあるがエンディミオンは、その言葉に勇を鼓される。

しかし想像の翼に運ばれるうちに、彼は気を失なおうとしてシンシア (月の女神) の救いを求める。その時、深い洞穴の中から一つの声がひびいて来て、声が導く所へ地中を下って行け、と告げる。地底でもエンディミオンは喜びと孤独との交替をくり返ししながら、遍歴を重ねることになる。

先ず大理石宮でシンシアを遠く望んだのち、暗い淵に立った彼は死の如き孤独感——

21) 例えば Book II, 830~35

Book III, 54~55

22) Book I, 1.797

deadly feel of solitude ——に襲われる。これこそ、まぎれもない常の自己への帰還——
 journey homeward to habitual self——である。地上の空も森も花も（即ち第一の幸福）
 ない故に、その孤独感はいやされない。

far from such companionship to wear
 An unknown time, surcharg'd with grief, away
 Was now his lot

自然の睦みを遠く離れ
 悲しみ多き未知の時間を経て行く事が
 これからの運命だった。

この companionship が fellowship と同義であることはいうまでもない。地上のいおり
 ——my native bower——を見せ給え、という祈りと共に見えざる女神の曲に導かれて、
 幻の旅が始まる。曲の魔力によって森が現れる。森の中にはアドニスがこんこんと眠り続
 けている。この若者は、ヴィナスの愛を拒み続けたのであるが、猪の牙に突かれて命をお
 とす。しかしヴィナスの願いによって、ゼウスは夏の間だけ若者に命を授けることにする。

エンディミオンはヴィナスの降臨とアドニスの蘇生、そして共に喜こんで昇天する姿を
 見るのである。この光景に打たれて、エンディミオンは我が身の思いをこらえ切れずに、
 苦しみをかこつ。これに対してヴィナスは、彼が不死の者を愛しその苦しみに耐えている
 のを知ってはいるが、天でも恋は未だ秘密である、しかし導きの声に従って行けば、試練
 の果てに恵みを得るであろう、と約束する。泉、花、鳥、水の精など幻の姿が、その後し
 ばし彼を慰めるが、それも消え去り、遂に暗い崖の上で道を失なう。ゼウスに祈ると一羽
 の鷹が現れる。その背に運ばれて谷底のジャスミンの茂る野につく。再び天界の曲をきき、
 豊かな緑と花に喜びを得るが、エンディミオンには喜びのあとの孤独が既に恐れられるの
 で、不安を除く為に夢の力を借りて、導きの声の女神をつきとめようと思う。

O let me then by some sweet dreaming flee
 To her entrancements : hither sleep awhile !
 Hither most gentle sleep ! and soothing foil
 For some few hours the coming solitude.

それなら甘い夢の力で
 彼女の夢幻に逃れさせ給え。きたれ、
 限りなく優しい眠りよ、しばし晴らせ、
 きたるべき孤独を。

夢の慰め、惑わしを呼ぶのである。この夢の中で、エンディミオンは身をもって愛の陶酔を得、全ての怖れを払おうとするが、彼のことは、再び、陶酔の瞬間性を語る以外の何物でもない。

O known Unknown ! from whom my being sips
Such darling essence, wherefore may I not
Be ever in these arms ?

ああ、知りながら知りつくせぬ人、
そのいとしい精をこの身にのみなながら、
なぜその腕に永く安らえないのか。

又、それに答える声も、さめていなければならぬ陶酔のパラドックスを語る。

Revive, or these soft hours will hurry by
In tranced dullness ; speak, and let that spell
Affright this lethargy !

さめなさい、でないと、この柔らかな時が
酔いしびれて飛んでいく。語りなさい、
その呪いで倦怠をおどしなさい。

しかし、謎の女神は、はじらいのため名乗れないこと、名を明かせば、はじらいの色で天界にも恋が露見することを恐れているのだ、と語って去って行く。このあと不毛の地底に響く生の音、小川の姿をしたアレシュエーザとアルフェウスのあとをエンディミオンは追うが、谷に落下する二人に彼は胸を打たれて幸福を祈る。この無償の祈りによって、彼は地底から海底へと導かれる。

海底の世界にふみ込んだエンディミオンは、月の光に元気づけられながらも、子供の頃から月に親しみを持ってきたながら、地底での抱擁以来、名も知らぬ女神に心が奪われてしまった悔恨を心に抱いている。幻い頃、月は悲しい時には涙を拭ってくれ、幸福な時には手を取り合って明け方迄天空を歩いた姉に思えた。成長してからも、それは友の声、女の魅力であった。それなのに今では、この月の光が新らしい愛をかき消そうとしている。

どうか光を抑え、心変りを許してくれ、と祈ると、彼の目の前に老いたグローカスが現われる。彼は海の妖精シラに思いを寄せる若者であったが、彼を避けるシラに心を苦しめられていた。そして魔女キルケの化身した美女のとりことになってしまう。ある朝、これがキルケであることを知り逃げ出すが、再びとらえられ、シラは殺されグローカスは千年の

老いを呪われる。この魔法を解く鍵を記した巻物により、エンディミオンこそ呪いを受け
る男であることが判る。

Book III, 477行以下にグローカスの語る魔女は「マクベス」の妖婆の場面にも似てい
るが、キルケは官能の象徴である。Book IIIも、この一点に凝縮した後、pityの力によっ
て再び光の世界へと展開していく。海底からエンディミオンを、老いと死からグローカス
を救うのは、warm pity—fellowship—である。

興味深いのは、グローカスがエンディミオンと共通な性格を付されていることである。
プロットの上で恋の迷路にふみ込んだ（あるいは、そう考えている）点に限らない。グロ
ーカスも又、fellowship を求める孤独の若者だったのだ。

I was a lonely youth on desert shores.
My sports were lonely, 'mid continuous roars,
And craggy isles, and sea-mew's plaintive cry

私は荒磯に住む孤独の若者だった。
楽しみも一人、果てしない海鳴り、
切り立つ島々、カモメの哀れな声の中。

But the crown
Of all my life was utmost quietude :
More did I love to lie in cavern rude,
Keeping in wait whole days for Neptune's voice,

でも静けさに浸る時こそ
いちばんの楽しみだった。
ネプチューンの声が聞きたくて、一日
洞穴に伏す事がもっと好きだった、

これはソネット「海に」（「エンディミオン」開始直後の1817年4月作）に見るキーツの
姿そのものでもある²³⁾。

「では、」エンディミオンは喜悅して叫ぶ、
「この運命の中で私達は双子の兄弟なのだ。」

23) 古い洞穴の口にすわり、想え、
海の精の歌かと驚くまでも。

エンディミオンの叫びは、単にグローカスを救わなければ自分も死んでしまう、という運命を越えて、二人の相似性 (twin) を示す叫びでもある。Warm pity の源は、ここにある。呪いのとけたグローカスは若い神に生まれ変わり、シラも元にもどる。

このあと、ネプチューンの城でヴィナスに再会し、再度あたたかい励ましを受けるが、人間の世界を遠く離れたエンディミオンは、めまいを覚える。空しく眼を閉ざした彼の想像力も、めまいを更に耐えがたい物とする。これまでも、たびたび現れたエンディミオンのめまいが何を意味するか。—— Fellowship を失なった想像の飛翔の恐怖、狂気であることは確かである。

ああ、私は死ぬ。ヴィナスよ、助け給え、

わが美しい乙女はどこにいるのか。

Fellowship を求める叫びである。しかし、想像力は一大危機に直面して、やがて救われる。未だ正体の知られざる女神が、彼の「熱いあわれみ」と「高い行ない」によって、彼を天にむかえようと、心の耳に囁くのである。同時に、若者は湖のほとりの森に立ち戻っている。

草のしとねに立ち帰り何と幸せなこと！

草のしとねは、「健康」を得た魂の憩いの場であり、地底・海底は、狂気と死という「病い」を秘めたwilderness (Book I, 59) といえる。

4

しかし、エンディミオンが再び立ち帰った人間の世界は、もはや死の影を宿している。新しい現実感覚を得た Book IV は、この poetic romance の終章であると共に、以後の詩人の人生を予告する心理の内部をも、のぞかせて興味深い。それは、「ねむりと詩」—— *Sleep and Poetry*——にも設計した nobler life²⁴⁾、更には、人生を暗示する多くの部屋を持つ館²⁵⁾の第三の部屋になお、去来する美の夢を伝える想像力の予告としても貴重である。

人間の生活を沢山の部屋を持つ大きな館にたとえてみよう。…先づ最初に入っている部屋を我々は幼児の部屋あるいは無思想の部屋と呼ぶ。…長い間そこにとどまっているのだが、それでも第二の部屋に通じるドアは広く開けられていて、明るい様子を見せている。…その第二の部屋——処女思想の部屋——に入り込むや我々は酔いしれる。

24) *Sleep and Poetry* 1. 121

25) L.64 (May 3, 1818) レノルズ宛

…しかし、ここでの呼吸がもたらす効果の一つに、人間の心と性質に対する目を研ぎすまし、この世の中には悲惨、失意、痛み、病い、抑圧が充ちていることを神経に納得させる大きな効果がある——それと共に、処女思想の部屋は暗くなり、同時に部屋の四方のドアが開かれる——でも暗い、どれも暗い廊下へ通じている——我々には善惡のつり合いが見えない。霧にとざされる・・・

さて、地上でエンディミオンは、一人の娘の歌声を耳にする。それは、全ての快樂を得たのち、一人の存在に突き返されたインド娘の嘆きの歌である。

there's not a sound,
Melodious howsoever, can confound
The heavens and earth in one to such a death
As doth the voice of love ...

どんな美しい調べも
愛の声ほどには、天と地とを
かくも一つの極致に
とかし込めない。

これは、Book Iにおけるエンディミオンのことば、

Nor with aught else can our souls interknit
So wingedly.

また愛の他に、人の魂が
かくも速やかな翼で織りなされはしない。

に対応するインド娘の言葉である。とかし込む (confound) ものとして愛の歌を彼女は歌うが、それもやはりエンディミオンのいう fellowship の歌に違いない。こうしてインド娘もまたエンディミオン (キーツ) の息をふきこまれた一つの分身である、と解釈される。だから、グローカスに「双子の兄弟」を感じたように、この娘の嘆きの中には kindred pain を見出すのである。

Feeleest not a kindred pain
To see such lovely eyes in swimming search
After some warm delight ... ?

あの可憐な目が、あてどなく
 あつい喜びを捜しているのを見て
 同じ痛みを感じないか。

多くの部屋を持つ館のたとえを借りれば、二人は今、第二の部屋の出口にさしかかっている。一方には、すべての喜びに別れを告げて死を迎えようとしているエンディミオンがある。

That I may pass in patience still speak :
 Let me have music dying, and I seek
 No more delight—I bid adieu to all.

静かに息絶えるように、語りつづけよ。
 死の際に調べを聞かせよ、もはや
 喜びは求めぬ。さようなら、すべて。

又、他方に、bitter-sweet²⁶⁾を歌うインドの娘がある。彼女も、愛の夢にあざむかれた、いたでをいやすために、ガンジスの故郷を離れて、バッカスの一行と共に世界の快楽を求めた果てに、わびしく一人、木蔭に休んでいたのである。

O Sorrow,
 Why dost borrow
 The natural hue of health, from vermeil lips? —
 To give maiden blushes
 To the white rose bushes?
 Or is't thy dewy hand the daisy tips?

悲しみよ、
 紅い唇から
 生きた健康の色を奪うのはなぜか。
 乙女のはじらいを
 白バラの茂みに与えるためか。
 雛菊をそめるのも、その涙の手か。

26) *On sitting down to read King Lear once again*

娘の歌の最初の四連（上は一連目）は、快の中にひそむ苦を、遠のく陶醉の余韻の中で歌っている物だ。第五連では更に覚醒した認識で、人間存在の孤独ともいえる物が歌われる。

To Sorrow,
I bade good-morrow,
And thought to leave her far away behind ;
But cheerly, cheerly,
She loves me dearly ;
She is so constant to me, and so kind :
I would deceive her
And so leave her,
But ah ! she is so constant and so kind.

悲しみに
朝わかれて
遠く取り残そうとしたのに
元気をお出し、元気を、と
悲しみは私をいたわる。
それはいつも素直でやさしい。
あざむいて
わかれたいのに
ああ、それはいつも素直でやさしい。

風が娘の心象風景をのぞかせる。既に、deathful glee の余韻がある。

And listened to the wind that now did stir
About the crisped oaks full drearily,
Yet with as sweet a softness as might be
Remember'd from its velvet summer song.

そして風を聞いた、今はかわいた
カシをわびしくふるわす
なめらかな夏の歌のかたみ、
やわらかい静かな風を。

不思議な女神から離れて、この kindred pain を持つインド娘に向かう心に、エンディミオンは抗うことが出来ない。この時、彼は人間の限界の中で終焉することを願う。

可愛い声で囁いておくれ

この世であるとわかるように。

二人は眠り夢を見る。天馬にまたがり二人は空をかける。天界はシンシアの結婚の宴を控えているが、眠りの神の霞の中で二人は眠ってしまう。エンディミオンは新しい夢を見る。神々の集まりの中に、シンシアが昇って来る。それは、まさしく、ケシの野で夢に見た乙女であった。はっとして、眼ざめる——驚くべきことに、そこは夢さながらの情景でシンシアが彼に身を寄せている。彼女を忘れてインド娘を愛した彼が、彼女の許しを求める。しかし、彼はインド娘も忘れさることができない。女神は泣いて、消える。再び、彼の心はインド娘に戻るが、この時、アイデンティティー喪失の恐怖が彼をとらえる。

What is this soul then? Whence

Came it? It does not seem my own, and I

Have no self-passion or identity.

Some fearful end must be.

では、この魂は何か? どこから

うまれた? 私の物ではないように見える、

私には一貫した情熱がない、自分がない。

何か恐ろしい結果がくるに違いない。

self-passion とは文脈から判断して、self-same passion のことであろう。

エンディミオンが identity の喪失を恐れる時は、キーツが、存在の孤独——人間に内在する本来的な孤絶——を感じとった時ではないか。同時に、虚無感を克服するたたかいが始まり、やがて「魂の創造」——アイデンティティーの創造——が手紙の中で宣言される日が来る。

ともかく、アイデンティティーの欠落は、キーツがシェークスピアの物であると考えた negative capability をわが物ともするために払わねばならなかった代価であったのだろう。しかし、夢からさめたシェークスピアが作品に露出することはなく、人物は作品の中で、それぞれ一人歩きしている。これに反して、キーツには対象に同化する力はあるながら、それが持続性を持つことはなく、結局は、打ち捨てられた²⁷⁾自分に戻って来る。まさに、

27) cf. *Ode to a Nightingale*

Forlorn! the very word is like a bell

To toll me back from thee to my sole self!

一瞬の fellowship であり、キーツの影は濃淡の変化を見せながら、作品の底に宿っているのである。ここに、二人の息の長さの差があり、ドラマの能力のちがいがあったといえる。

さて、恐怖のためエンディミオンは、天界を逃れる。ところが、雲間から月が顔を現わすと同時に、娘は消え失せてしまう。女神もインド娘も共に失なれて、物語りは、人間の内在的孤独に目ざめて行く。静寂の洞穴——cave of Quietude——は、それを認識した時に現れる、と見られる。

There is a den,
Beyond the seeming confines of the space
Made for the soul to wander in and trace
Its own existence, of remotest glooms.

空間の目に見えぬ境の向うに
魂がさまよい、その存在を跡づける
遠い闇のほら穴がある。

‘native hell’ にかこまれたこのほら穴、即ち、静寂の洞穴は、大きな館の三番目の部屋である。「幸福の闇」であるとか、「青白さも健康の花となる暗い樂園」と書かれているとおり、これは、第二の部屋の苦楽の価値も転換する逆説的な世界である。

But few have ever felt how calm and well
Sleep may be had in that deep den of all.
There anguish does not sting ; nor pleasure pall.
Woe-hurricanes beat ever at the gate,
Yet all is still within and desolate.

しかしその洞穴の眠りの
安らかさと深さを知る者は少ない。
苦痛はいたまず、快樂は飽きない。
嘆きの嵐は入口を打ち続けるが
なかは静かでわびしい。

それは求めて得られる場所ではなく、受苦者が火に燃え始める時、忽然と開かれるのである、とキーツは説明するが、それは、人生を芸術家の魂を創造する場所と念じた、彼の求道的態度を表わす物と見ていい。

インド娘も消えて、彼一人静かに、霧の山頂に降りた時、

世界の涯に住む者には

嘆きはほのかで、悲しみは影にすぎない。

この感慨が、静寂の洞穴を得たエンディミオンを迎える。この霧にとざされた山、世界の涯が、想像の羽をたたんだ死後の世界に近づいていることにも注目したい。三年後、確かな死の予感を持ったキーツの手紙に見られる感懐にも即しているのである²⁸⁾。だから、夢がさめ、再びインド娘を見出しても、もう新らしい夢を追ったりはしない。その目は後退的である。

Adieu, my daintiest Dream! although so vast

My love is still for thee. The hour may come

When we shall meet in pure elysium.

On earth I may not love thee ;

さらば、うまし夢よ！ この広い

愛の中にお前の分も残そう。やがて

楽園でお前にあう時が来る。

この世では、もう追いはしない。

エンディミオンは、二人で山にひきこもる生活を語る。それは、光につつまれた、王の姿ではない。

Dusk for our loves, yet light enough to grace

Those gentle limbs on mossy bed reclin'd :

二人の愛を包む薄やみも、草に休めた

やわらかな腕を、ほのかに照らす。

いわば「中位の春」の平隠があるのだが、しかしそこに、第二室の夢が去来する。

Still let me speak ;

Still let me dive into the joy I seek, ——

For yet the past doth prison me.

でも、語らせてくれ、

28) L.241 (Nov.30, 1820) ブラウン宛

I have an habitual feeling of my real life having passed, and that I am leading a posthumous existence.

でも、求める喜びにひたらせてくれ、
いまでも過去は私をとらえているから。

しかし、娘も、別れなければならないことを告げる。二人は、谷間に下りて行く。ピオナが現れる。喜んで二人を迎え、彼らの王と女王になってくれる様に促すが、エンディミオンは、一人隠者として人々の繁栄を守ることを告げる。

どうか、この若い娘を、
かわいい妹としてくらしておくれ。

こういって、娘と妹を残す彼が、後の日のキーツ、つまり恋人ファニーと妹ファニーとの親交を望んで死んだ姿そのままである、その奇妙な符合にも驚くのである。ダイアナの神殿の彼方の森で、エンディミオンは、蝶が去ったぬけがらのような心を抱いている。

King of butterflies, lord of flowers であった彼を、今、大きな死の影が包む。枯葉と共に、その影に服そうとしているエンディミオンである。それは甘美に酔いしれることができた人間が、はじめて到達できる結末であろう。芸術、科学の隆盛を誇ったギリシャの人々をもとらえたニヒリズムかも知れない。

immortality——不死——の対局にある mortality——必滅——と impiety——不敬——は、
ここで最も深まる。

My kingdom's at its death, and just it is
That I should die with it: so in all this
We miscall grief, bale, sorrow, heartbreak, woe,
What is there to plain of?

私の王国は死を迎える、そして私も
共に死ぬのはふさわしい。かりそめに
嘆き、悲しみ、いたみ、失意と呼ぶ物に
かこつべき物があるうか。

I did wed
Myself to things of light from infancy;
And thus to be cast, thus lorn to die,
Is sure enough to make a mortal man
Grow impious.

幼ない日から

私は光ある物を友として来た。

今、投げ出され、ただ一人死ぬのは

必滅の人の神への誠を

滅すに足る。

一元的な喜び、或いは悲しみでない、deathful glee に沈潜しているエンディミオンの前に、この時、ピオナとインド娘が別れを告げに現れる。

sister, I would have command,

If it were heaven's will, on our sad fate.

妹よ、天の御意であれば、

私は人の悲しいさだめを支配したかった。

人間存在の孤独と対して、それを征服しようとしたエンディミオンの自白である。この時、インド娘は輝く月の女神シンシアに変身し、エンディミオンも人の身を脱して、森の中に吸い込まれてしまう。呆然として家路につくピオナをあとに、神と化して消えるのである。

5

エンディミオンは消えた。そして期せずして、シンシアに招かれて森の中に失せた。後に残されたピオナは、「驚きあやしみつつ」家路をたどる。エンディミオンは、アイデンティティを見失なって「何か恐ろしい結果」を予期していたのであったが、その結果は、彼のアイデンティティとは直接関係のない、インド娘とシンシアとの同一化となって、しめくられる。

この点で、ピオナの驚きは、我々の驚きともなる。唐突感が残されるのであるが、その点は、作者キーツも承知のようである。「エンディミオン」に付した前書きの中で、彼は次のようなことを述べている。

It is just that this youngster should die away: a sad thought for me, if
I had not some hope that while it is dwindling I may be plotting, and
fitting myself for verses fit to live.

この若者が死んで行く、それはそれで結構なことだ。或いは、悲しむべきことなのかも知れない、もしこの悲しみにかえて、私が生のための詩を構想し、その準備を整えていこうという希望がなかったならば。

つまり、キーツは「蝶からサナギへ」の成長の一つの過程として、その手でエンディミオンを消し去ったわけである。エンディミオンの遍歴は、ひとまず、ここで終結することにはなるが、キーツ自身にとっては、それは新しい遍歴への出発となったのである。

ここで既にねり始められている生のための詩とは、「ハイペリオン」を意味している。その構想の説明²⁹⁾を待つまでもなく、エンディミオンとアポロの演じる神化には、大きな差がある。愛の夢の挫折が、静寂の洞穴をもたらし、期せずしてシンシアと合一して行くエンディミオンの神化と、「広い知識で、この頭脳を満たし給え。」と、迫って行くアポロ誕生の差である。勿論、前者を支えるものは、Book I 冒頭に見た、美の救いに対する信頼であるのだが、「エンディミオン」は唐突であり、「ハイペリオン」のアポロは、そのひたすらな性急さのために、共に成熟の印象から遠いことは明らかなが、少なくとも、「エンディミオン」のあとに、キーツの生きる姿勢が整えられて行くことは確かである。このことについては、七か月にわたった「エンディミオン」制作の月日を前後にはさむ、二つのソネット——制作中、時折読んだ「リア王」に関係ある——*On the sea* (1817年4月18日作)と*On sitting down to read King Lear once again* (1818年1月22日作)の姿勢が示唆に富んでいる。

Oh ye ! who have your eye-balls vex'd and tired,

Feast them upon the wideness of the Sea :

Oh ye ! whose ears are dinn'd with uproar rude,

Or fed too much with cloying melody, ——

Sit ye near some old cavern's mouth, and brood

Until ye start, as if the sea-nymphs quir'd !

ああ、悩み疲れた眼球を持つ者よ、

広大な海原をその眼に味わえ。

29) L.38 (Jan.23, 1818) ヘイドン宛

one great contrast between them will be—that the Hero of the written tale being mortal is led on, like Buonaparte, by circumstance; whereas the Apollo in Hyperion being a foreseeing God will shape his actions like one.

ああ、世の喧騒が耳に鳴りさわぎ、
 調べももはやその耳を倦ます者よ、
 どこか洞穴の口に坐して、想え、
 海の精の歌かと、驚くまでも。

このように、*On the sea* は、fellowship の慰めを求める歌である、といってよい。これに反して、*On sitting down to read King Lear once again* においては、妖精や女王のロマンスには別れを告げて、生の炎をくぐり抜け、不死鳥の翼を得ようという心構えがある。

the fierce dispute
 Betwixt damnation and impassion'd clay
 Must I burn through ; once more humbly assay
 The bitter-sweet of this Shakespearian fruit.

厳しい
 地獄と熱情の土くれとの斗いの中を
 燃え進み、ふたたび謙虚に、
 この沙翁の実の苦い甘さをなめねばならぬ。

のちに、魂 (soul) は、キーツにとっては、アイデンティティその物として、また、この世は「魂を作る谷間」 (vale of soul-making) と考えられるようになる。³⁰⁾

お望みなら、この世を「魂を作る谷間」と呼んでもいい。(中略)「魂を作る」という時、その魂というのは知性——intelligence——とはっきりと区別されたものなのだ。何万人という人々の中にも、知性は、いいかえれば、神聖の閃きの数々はあるだろう、でも、それらがアイデンティティを獲得し、それぞれが、自分自身になる迄は、「魂」とはいえぬものなのだ。

長い創造の試練は、重い一階程を抜いた収束に終わったが、しかし、それは「魂」創造への方向を示しているようだ。

(文中、書簡と整理番号はH.B.Formanの全集——Phaeton, 1970——による。)

30) L.123 (Apr.15, 1819) 弟夫妻宛